歴研おかやま
okayama history research society

第３９号
令和６(2024)年７月26日発行
会　員　募　集　中
年会費　3,000 円
10月以降入会 1,500 円

令和６年度定期総会開催される

４月 29 日に岡山県立図書館で令和６年度総会が開催され､38 名が出席した。総会は事務局次長･運営委員の濱手英之氏の司会で始まり、楠敏明会長により議事が進行した。

まず、令和５年度事業報告が楠敏明会長から、決算報告が中山幸子副会長・会計から、そして監査報告が監事の那須丈平氏からなされ、いずれも拍手で承認された。続いて楠会長から令和６年度事業計画、予算案が説明され、承認された。さらに､今年は２年任期の役員改選の年にあたるため、役員改選案が提案され、承認された。

役員改選で変わった主な内容としては、山崎副会長及び山田事務局長が健康上の理由で退任されたことがあげられる。事務局長は当面楠会長が兼任することになり、新たに語り部委員長の丸谷憲二氏が事務局次長として就任し、濱手事務局次長との２名体制になった。また、事業委員長（歴史探訪会やウオーキングなどを担当）であった工藤博氏の後任として、新たに古川智氏が就任した。

議事終了後、この総会をもって副会長を退任し顧問に就任された山崎泰二氏から、副会長退任の挨拶があった。最後に大河原副会長が閉会を宣言して総会は終了した。

長年副会長として会の発展に尽くされた山崎氏、及び令和元年から事務局長を務められた山田氏に心から感謝を申し上げるとともに、新体制の下で岡山歴史研究会の各種活動が一層活発になるよう期待したい。

歴・研・展・望

先般、後楽館中学・高校の校長から、現在の教育内容について教えてもらった。多様化社会に対応できるように授業を構成しているとのこと。討論の時間や、考える時間を増やしている。化粧やピアスを付けて登校しても、それも多様化の一環とみなし注意はしないとのこと。時代に合わせて教育が変わってきていると感じた。他の高校でも同じ傾向にあるとのことだった。ただ、我々の世代の子供が親になり、子供に対する家庭教育が大きな問題であるとも話しておられた。我々の頃は良い大学に入り、いい会社に就職するために勉強するのが暗黙の了解だったように思われる。

とはいえ、齢を重ねてきて、読みたい本は、現代風な生き方を紹介するものより、長命で現役を続けて来られた人達の書物である。日野原重明医師、佐藤愛子、瀬戸内寂聴等の書である。歴史上では､勝海舟の「氷川清話」を座右の書にしている。さらに言えば

良寛さんの辞世の句
　裏をみせ　表をみせて　散る紅葉
豊臣秀吉の辞世の句
　露と落ち　露と消えにし　我が身かな　なにわのことも　夢のまた夢
徳川家康の人生訓
　人の一生は重荷を負い遠き道を行くがごとし、急ぐべからず
キリスト教の聖書の
　たとえ世界を得ても自分を失って意味があるのか

などに、心に沁みるものを感じている。

（楠　敏明）

記念講演

「岸田吟香の生涯と功績」

武庫川女子大学教授　*山口　豊 氏*

総会終了後、山口豊武庫川女子大学教授による「岸田吟香の生涯と功績」と題した講演があり、46 名が出席した。岸田吟香は天保 4 年（1833）今の岡山県美咲町に生まれ、幕末から明治にかけて生きた人物であり、日本の近代化に大きく貢献する多彩な業績を残した。画家の岸田劉生の父でもあり、卵かけ御飯でも有名である。本講演では、この吟香の生涯とその業績について、4 期に区分して年代順に解説された。その概要は以下の通りであった。

少年時代（誕生～ 19 歳）　天保 4 年（1833）～嘉永 5 年（1852）

岸田吟香（幼名辰太郎）は幼い頃神童と呼ばれ、12 歳の頃には「大魚は小池に遊ばず」が口癖であったという。遊ぶとは泳ぐとの意味で、絶えず向上心を忘れないということである。12 歳で旧久米町坪井の安藤善一に入門し、14 歳の時には津山城下に行き漢学を学んだ。津山では私塾も開いた。19 歳の時に江戸に向かったが、母の実家近くの円城寺に「深山大沢必出龍蛇」という落書きを残した。

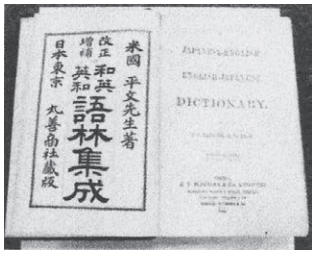
諸国行脚・放浪時代（20 ～ 29 歳）　嘉永 6 年（1853）～文久 2 年（1862）

江戸では、20 歳の時に津山藩儒学者昌谷精渓に師事。21 歳で林図所頭の代講で水戸藩邸で講義をしている。安政大地震（1855）により故郷に戻り、翌年には大坂で藤田東畯などに学び、24 歳で藤森弘庵（天山）の門下生となったが、安政の大獄により弘庵が投獄され、代稿の疑いがかけられたので上州伊香保に避難。27 歳の時密かに江戸に戻り、「経師屋銀次」（注 1）と名乗って湯屋の三助や、左官、吉原の妓楼の主人など職を転々とした。周りから銀公と呼ばれたため、自分の名を「ぎんこう」「吟香」に改めた。文久 2 年に吉原が火事になり、妓楼の主人を辞めた。

横浜･上海時代（30 ～ 44 歳）　文久 3 年（1863）～明治 10 年（1877）

文久 3 年、眼病を患い医師にかかったが治らず、津山藩蘭学者箕作秋坪から横浜居住の名医ヘップバーン（ヘボン）を紹介され、1 週間で完治した。ヘボンは米国人宣教師で語学者でもあった。ヘボンに依頼され対訳辞書（注 2）の編集に励んだ。ヘボンからジョゼフ・ヒコ（浜田彦蔵）を紹介され、ヒコから英語を学んだ。

元治（げんじ）元年（1864）、日本初の邦字新聞「新聞紙」を創刊。慶応 4 年（1868）にはヴァンリードと「横浜新報もしほ草」を発刊。その後明治 6 年（1873）には日報社（現毎日新聞社）の主筆になり、記事を平仮名まじりの読みやすい口語体にするなど、日本語の平易化に貢献した。明治 9 年には東北・北海道を巡行した明治天皇に随行し、東京日日新聞（現毎日新聞）に記事を掲載。



慶応 3 年（1867）、ヘボンから製造方法を聞き、日本初の液体目薬「精錡水」を製造販売し、上海など中国にも進出。明治 3 年（1870）、東京・横浜間の定期航路を開拓した（2 年後の新橋・横浜間の鉄道開通により撤退）。翌年には日本初の氷製造販売業を開始。石油採掘業には失敗した。

眼病を患った吟香は、明治 8 年（1875）に銀座に精錡水調合所（後の楽善堂）を創業。目薬の販売収益をもとに「訓盲院」の建設を目指した。

銀座・中国進出時代（45 ～ 72 歳）　明治 11 年（1878）～明治 38 年（1905 年）

明治 12 年（1879）、築地に楽善堂訓盲院が完成。盲人の教育・福祉に寄与した。翌年には上海楽善堂をオープンさせるなど、中国各地でも活動した。

目薬を通して製薬業界や売薬業界に信望を得て、明治 13 年に東京売薬業組合頭取になった。明治 23 年（1890）､荒尾精が設立した「日清貿易研究所」（東亜同文書院の前身）にも参加し、この年に全国薬業組合会頭になった。明治 28 年には日本薬学会編集委員となり、薬学会の発展に貢献した。同年に開催

された薬物博覧会委員を務め、薬物の危険性を認識してアヘン撲滅運動にも参画し、清国のアヘン撲滅を訴え続けた。若者の知日教育に力を入れるとともに、日清文化交流に尽くした。明治 38 年、72 歳で死去。

本講演を聞き、吟香は波瀾万丈の人生を送ったが、まさに近代日本の礎を築いた偉大な人物であったことがよく理解できた。また、講演後の質疑応答の中で、出席されていた美咲町の「岸田吟香を語り継ぐ会」の方から、吟香が日本国内だけでなく中国を始めアジア全体を大切にする考えを持っていたことなどが紹介された。

（注 1）経師屋とは表具師のこと。
（注 2）日本初の対訳辞書。「和英英和語林集成」の名称で慶応 2 年（1866）に完成。上海で印刷された。

歴研サロンが開催されました

令和 6 年 1 月 18 日

「疾病の歴史から見る祇園神社と牛頭天王物語」

講師　医療法人　青木内科小児科医院理事長
全国地域包括在宅介護支援センター協議会会長　青木佳之 氏

医師で在宅介護の専門家、歴史にも造詣の深い青木佳之氏が表記演題により講演され、30 名が熱心に聴講した。疫病を防ぐ神としての牛頭天王の歴史について、感染症の歴史や岡山との深い関係などを含め多岐にわたる話題を提供されるとともに、科学、医学としての現実空間（新型コロナ感染症対策など）と歴史的仮想空間（牛頭天王物語など）との共存がなされるべきとの持論を展開された。その概要は以下の通りであった。

新型コロナはまだまだ蔓延しているようであるが、感染症については歴史から学ぶことが重要と思う。医学、科学においては、人の体を考えるとき臓器、細胞、そして遺伝子レベルで考える時代になった。人間の歴史は 5 千万年、ウイルスの歴史は 35 億年ということで、人間がウイルスと戦うという方法論では対応できないと思う。共生することを考えるべき。今回のパンデミックから得られた教訓として、自然と人間社会の調和、感染症に対する知識の共有、デジタル技術を使ったコミュニケーションへの転換、社会的弱者への適切な対応などがある。新型コロナへの対応策は、マスク着用、密にならない、患者の隔離など、100 年前のスペイン風邪の時と変わっていない。

狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会と社会が進化してきたが、これからは仮想空間と現実空間を上手に併せたような社会構造（Society5）が必要である。牛頭天王の話もこの文脈にある。

牛頭天王は京都祇園の八坂神社の祭神で、疫病を防ぐ神であり、薬師如来を本地仏（本源たるもの）、スサノオを垂迹（この世に形として現れるもの）とした、神仏習合の神である。祇園精舎の守り神で、ヒンズー教の神様であった。日本では蘇民将来説話の武塔天神（注 1）と合体しており、本来とは逆に、薬師如来の垂迹であるとともに、スサノオの本地とされた。祇園社や播磨の広峯神社などで祀られたが、神仏分離により明治以降はスサノオとして全国の祇園社、天王社で祀られている。感染症の伝播と同じように、牛頭天王はインドから中国へ来て、中国では神農（炎帝、農業・医薬・音楽などの祖神）や鍾馗（道教で疫病退散の神様）と習合し、日本に来た。仏教では高位順に如来、菩薩、明王、天となるが、牛頭天王は外国から来たので記紀では粗末に扱われている。七福神、金比羅神なども同様である。

聖武天皇時代に天然痘が流行し、社会不安もあって天皇は心を痛め、大仏造立を発願

した。大仏開眼供養は孝謙天皇、聖武上皇などの臨席のもと、インドのバラモン僧により行われた。当時、インド、中国、新羅、日本という交流の流れがあり、秦氏などについても同様と思う。

その少し前、吉備真備が内親王時代の孝謙天皇の学士（教官）になっている。吉備真備は留学生として 18 年間入唐し、律令制などを広く学んだ。牛頭天王物語は真備が作ったのではないかとされる。奈良出生説もあるが、自分としては真備は岡山出身と思いたい。

牛頭天王は、明治の廃仏毀釈でスサノオに変えられたところがほとんどである。備後国風土記逸文の蘇民将来説話は、福山市鞆の浦の沼名前（ぬなくま）神社、もしくは福山市新市町の素戔嗚神社が発祥の地ではないかと言われている（注 2）。自分としては、海上交通等の便利から沼名前神社ではないかと思っている。吉備の国から発しているということである。その後に姫路の広峯神社に行き、神戸の祇園神社を経て京都の祇園社に行った。修験道の関係者がそのように言い伝えたのではないかとされる。

この物語を作った吉備真備は、吉備大臣宮（矢掛町）などに祀られているが、菅原道真に比べると祀られているところは少なく、吉備真備をもっと知ってほしいものである。姫路の広峰神社には奥の院に行く途中に吉備社があるが、そこには磐座があり粗末な社があった。吉備真備が唐へ行くときに寄島に寄っているが、そこにも神社があり元は牛頭天王宮と言われていたが、明治になり主祭神はスサノオに変えられた。

平安時代に安倍晴明が書いたとされる『三国簠簋（ほき）内伝』（実際は中世頃の別人の作か）に、牛頭天王のいわれなどが書かれている（三国はインド、中国、朝鮮又は日本）。江戸末期の平田篤胤は江戸の備中松山藩の表屋敷に 20 年ほどいたが、『牛頭天王暦神辯』の中で、吉備真備が作り上げた物語としている。

高梁の北にある補陀落山感神院祇園寺には今でも祇園宮が牛頭天王社としてそのままあり、もっと PR したいものである。山田方谷が玉垣を奉納している。瀬戸内市の余慶寺には、祇園牛頭天王堂が祀られている。牛窓にもスサノオ神社（通称疫神社）や祇園神社がある。西大寺にもある。さらに、自分の医院の近くに三社宮があり、牛頭天王が祀られているが、明治の時にやはりスサノオに変えられている。新見哲西町には疫清（えきずみ）神社があり、薬師如来の文字がある石に神仏習合の名残があった。そのほか、備前焼の牛が奉納される備前市の牛頭天王宮や、真庭の木山神社などもある。倉敷の安養寺にも牛頭天王宮がある。総社にもあるが廃墟のようになっていた。

以上は仮想空間の話であるが、これからの社会のあり方として仮想空間と現実空間の融合を考えていかなければならない。牛頭天王の物語は、そのための良い材料を提案してくれていると思う。般若心経には、色・受・想・行・識の五蘊（ごうん）（現象界の存在を形づくる 5 つの要素）が示されている。介護保険の中では、受想行識と同様の方法論でアセスメント・プラン作りが行われる。マネージメントの概念はアメリカのドラッカーにより始まったとされるが、仏教の世界には既にそのようなものがあったのである。歴史を学ぶ人は豊かな仮想空間を持っていると思うし、岡山・吉備の国からもっと発信していきたいものである。

ギリシャ神話のミノタウロスは牛頭人身の怪物である。ピカソのゲルニカにも牛が出てくる。バラモン教の中に梵我、天地、輪廻、因果応報、すべてのものに神が宿るなど、日本と同じような考え方がある。バラモン教を調べることで牛頭天王の答えが出るのではないかと思う。インドやペルシャの影響、あるいは秦氏の流れなどを考える必要がある。宗教は仮想空間の最たるものであるが、特に仏教はすばらしいと思う。

秀吉の水攻めや幕末の山田方谷の活躍など、歴史の切れ目の時に岡山、備中がからんでいるように思う。楯築遺跡も弥生時代から古墳時代への境目であった。仮想空間なので好きなことを述べたが、いろいろなことを一緒に楽しみながら考えていきたいと思う。

講演の最後に、今の日本はアメリカ一辺倒だが、中国とアメリカの間に位置していることを考えながらやっていくべきではないかということや、元旦に起きた能登地震の原因についてのコメント、また、関連して地震国日本の原発、特に中央構造線上にある伊方原発の問題点（地震で原発事故が起きれば、瀬戸内海が汚染される）などについても言及された。その後の質疑応答でも、関連する神社や寺院、神仏分離、科学と宗教との関係など、さまざまな話題について大変活発な議論があった。

医業と歴史という現実空間と仮想空間とが融合したフィールドにおいて、多方面に関心を持ち縦横無尽に活

躍されている青木講師のすばらしい知性と心性の輝きに、心から敬意を表したい。

（注 1）「仏説武塔天神王秘密心点如意蔵王陀羅尼経」に、天王には十種の変身があり、一は武塔天神王、二は牛頭天王、十は疫病神王とある。（『神道集』）
（注 2）備後国風土記逸文には疫隈国社（えのくまのくにつやしろ）とある。（『釈日本紀』）　（井上知明）

令和 6 年 2 月 7 日

「洛中洛外図の時代の京都を歩く」

講師　井上知明 氏（会員）

参加者 26 名。洛中洛外図屏風は、京都とその周辺を描いた屏風絵で、室町時代から江戸時代まで制作された。現在でも 160 以上の作品が残っており、岡山の林原美術館にも池田家に伝わった江戸時代の優品（重文）がある。最も有名で美しい「上杉本洛中洛外図屏風」（国宝）には、450 年以上前の京都が生き生きと描かれている。これまでの研究で、上杉本は永禄 8 年（1565）に狩野永徳が制作、天正 2 年（1574）に織田信長が源氏物語図屏風とともに上杉謙信に贈ったとされている。

今回の講演ではこの上杉本について、描かれた京都を 6 つのエリアに分けて、今の京都と比較しながらエリアごとに南から北へ歩いて見ていくことを想定して、応仁の乱後に復興した京（みやこ）の繁栄と屏風に描かれている多彩な事物について語られた。具体的には、権力者などの屋敷、寺社、名所旧跡、当時の風俗、描かれたさまざまな人びとなどについて、パソコンで 90 枚以上の写真を用いての解説であった。

上杉本では理想の都としての美しい京都が描かれるが、当時は、飢饉が起きたり感染症が流行するたびに多数の死者が出て、死体が路上や鴨川に投げ捨てられることもあった。昔の朱雀大路にあたる千本通りは、卒塔婆がたくさんあったということで名付けられたという。この時代は、庶民にとっては厳しい時代であったことに留意すべきとのことであった。

今の京都はもちろん当時とは大きく変わっており、当時の権力者たちの屋敷などは跡形もない。しかし、寺社などは建て替えられたり場所が変わったりしているにせよ、結構残っているものが多いし、当時と同じ場所に存在しているものもかなりある。また、京都の河川や山などの自然景観は大きくは変わっていない。この講演を聞いて、あらためて歴史というものの意味を考えさせられたし、今後観光などで京都に行った際には、参考になるのではないかと思われた。

令和 6 年 3 月 8 日

「資治通鑑（しじつがん）翻訳から見た秦氏渡来」

講師　岡　將男 氏（会員、楯築ルネッサンス副代表、全国邪馬台国連絡協議会副会長・中四国支部長、NPO 法人公共の交通ラクダ会長）

参加者 27 名。会員で『吉備邪馬台国東遷説』の著作で知られる岡將男氏は、現在、『資治通鑑』（注 1）の全訳という大事業に取り組まれている。今回はその過程で判明した秦氏の渡来についての講演であり、その概要については以下の通りであった。

秦氏、造山古墳の謎

秦氏については、日本に残っているものだけを見て研究してもだめだろうと思っている。中国の原典に当たってみないと分からないと思う。秦氏渡来を考える際、高句麗、三燕、北魏が大切である。高句麗は武装国家、あのあたりは武装してないと周りから攻められる。三燕は燕国、この時代には慕容（ぼよう）氏で、高句麗好太王（広開土王）の向こうにいた。倭国は高句麗とも戦ったが、高句麗からの亡命者も多かった。そのような状況の中に秦氏がいたと思う。高句麗好太王は 391 年に即位しているが、同じ頃に応神天皇も即位したのではないか。

その後 10 ～ 20 年後くらいに造山古墳ができ、牛窓の古墳群が始まったのではと思う。秦氏の渡来は 350 年～ 450 年頃ではないか。

中学生の頃から、日本で 4 番目に大きい造山古墳がなぜ天皇陵ではないのか、おかしいと思っていた。雄略天皇の時代の、吉備の叛乱伝承の意味の追求をしてきたが、岡山出身の古代史家の小林惠子（やすこ）氏は、雄略天皇は百済の王族昆支王ではないかとか、応神天皇は中国の前秦（五胡十六国の一つ）の苻堅（ふけん）のいとこの苻洛（ふらく）ではないかと書いている。小林氏の著作を見ると、初期の天皇はすべて中国か朝鮮から来たとある。自分も、欽明天皇や雄略天皇は怪しい（とても日本人とは思えない）と思っていた。雄略天皇が一番信頼していた 2 人は渡来人であり、欽明天皇の時代には百済の話ばかり出てくる。

その頃『三国史記』が翻訳され、どうもこの方が（記紀より）正しいのではないかと思うようになった。小林氏は、高句麗が滅ぶあたりの記述に『資治通鑑』を使っている。『資治通鑑』の全訳はないので、大学時代に中国語を少しやった自分が翻訳をすべきだと思うようになった。

『三国志』後の中国と騎馬民族

漢が 184 年に起きた黄巾の乱を契機に滅亡して、『三国志』の時代に入る。『三国志』の英雄は全員が将軍であり、邪馬台国の時代の中国は将軍の時代である。日本や朝鮮では、高句麗好太王や応神天皇の時代になると、中国から「開府儀同三司都督・・大将軍」の位をもらい、地域の支配権を追認してもらった。日本の古墳時代は、将軍の時代の始まりであると同時に、中国・朝鮮半島との交流が盛んになった。壬申の乱以降日本の国が成立し、日本語ができたのが 700 年前後。日本の建国は、西暦 700 年前後であると言える。

造山古墳の陪塚の一つである榊山古墳からは馬具がいろいろ出ている。この馬具は三燕の慕容氏の馬具である。三燕は実は 5 か国ある（注 2）が、代表的に三燕と言い、特に日本に影響するのが前燕、後燕、北燕である。馬具は 350 年～ 400 年頃に日本に入ってきた。新羅や長野県からも出てくるが、吉備には最初に馬具が入って来た。騎馬民族は確実にやってきた。あれだけ馬具が出るのに、馬だけがやってくるはずがない。

451 年、允恭天皇のときに中国南朝の宋に使者を出している。その頃、北の北魏では仏教が弾圧されて（注 3）、敦煌などから呼んだ僧たちが建康（南京の古称で宋の都）に亡命してきていた。その時代に造山、作山の古墳ができている。つまり、吉備が最も栄えた時代に南朝の宋に使者を出している。当然吉備の代表者は含まれていただろう。そして、建康で亡命僧たちと接触して、吉備に初めて仏教をもたらしたのではないか。そう考えて、このことを以前に小説にした。

『資治通鑑』が示す中国とその周辺の動乱

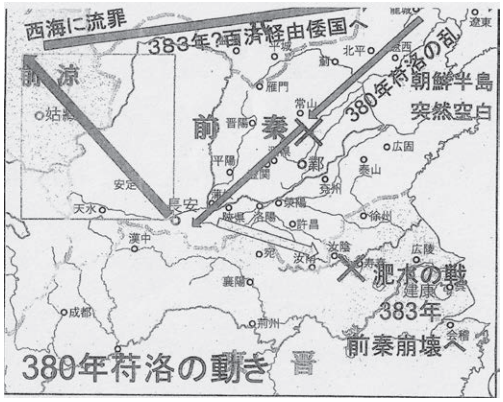
『資治通鑑』は『史記』や『三国志』（『三国志演義』ではない）のような紀伝体とは異なり、初めて編年体で書かれた史書である。人ではなく年代の順に書かれており、できるだけ正統的に書こうとしている。中華民国時代のテキストや 90 年くらい前の翻訳などがあるが、間違いも結構ある。インターネットなども駆使しながら翻訳に努めている。

『三国志』の時代は、実は遼東に公孫氏があって四国志とも言うべきもの。公孫氏のバックには高句麗がいた。その後中国は魏を乗っ取った晋（西晋）によりいったん統一されたが、西晋は叛乱によって 311 年に滅びた。その後、楽浪郡が 313 年に高句麗により滅ぼされた。317 年には西晋の後身である東晋が建国。

307 年、鮮卑族の慕容廆（ぼようかい）が大単于を称し、337 年には子の慕容皝（ぼようこう）が燕王と称した（前燕）。352 年に、慕容儁（ぼようしゅん）が即位したが、370 年に前秦の苻堅（氐族）により滅ぼされた。この時、朝鮮半島は空白になる。神功皇后がいたとしたら、「三韓征伐」はこの時代あたりか。倭国は 369 年に百済から七支刀をもらっている。

前秦の 3 代君主の苻堅は 376 年に華北を統一した。苻堅の称号は大秦天王である。遊牧民族では王が天王を名乗ることが多い。日本では牛頭天王が有名だが、雄略紀にも 1 箇所天王が出てくる。苻堅は、380 年に北京付近の将軍であった苻洛が起こした叛乱は鎮圧したが、383 年の淝水（ひすい）の戦いで東晋に敗れ、これにより前秦治下の各種族が独立し、華北は分裂状態を迎えた。この戦いは日本列島にまで影響を及ぼした。

慕容儁の弟の慕容垂は前燕の将軍であったが、後に前秦に亡命、前秦が淝水の戦いに敗れると 384 年に燕王



と称した（後燕）。さらに、高句麗を討ち、帯方王の慕容佐を高句麗に送り、高句麗王とした（小林惠子説ではこれが好太王）。しかし、後燕は 395 年の参合陂の戦いで北魏に大敗し、その後も北魏に圧迫されて遼東・遼西に押し込められ、高句麗遠征などで国力を消耗、407 年に滅びた。その後、後燕を滅ぼした漢人将軍により北燕ができた。後燕が滅亡し、亡命慕容氏などを中心として大量の難民が倭国に押し寄せたのではないか。この頃に秦氏の渡来があったのではないか。華南では 420 年、劉裕が東晋から禅譲を受けて南朝宋が誕生。

この時代、支配者は次々に変わり、新たな支配者が住民を移していた。前秦の時代を含めた魏晋南北朝時代の 150 年間に、1600 万人が移動したとされる。そのような中で、中国人は周辺の遊牧民族などと混血していく。中国とは中華民族の国ではなく、中国語を使う国と考えた方が良い。

苻洛が応神天皇になった？

苻堅のいとこの苻洛は将軍として北京付近に君臨し、朝鮮半島から倭国までも担当した。苻洛は「開府儀同三司」の称号を求めたが、与えられなかったので不満を持ち叛乱を起こした。しかし、敗れて涼州の西海郡に流されるが、小林惠子説ではその後倭国に来て応神天皇になったとする。『資治通鑑』には、苻洛は「座ったまま牛をひっくり返した」と書かれている。これは、牛窓のことではないだろうか。牛ころび→牛転（牛まろび）→牛窓と変化。牛まろびの話は備前国風土記逸文にあり、住吉明神が牛を投げ倒したとある。

日本に来た苻洛＝応神は神功と組んで瀬戸内海を通り、吉備と同盟して造山古墳を造った。次に牛窓を根拠地にして、次は播磨へ。播磨国風土記には天皇の説話 99 のうち応神の話が 52 例もある。この説話で多いのは国見と狩（巡狩）であり、どちらも新たに領地になったところを見て回ることである。その後応神は住吉大社に上陸した。備前国風土記逸文の住吉明神は応神天皇であろう。牛窓の唐子踊には、日本語でも中国語でも朝鮮語でもない意味不明の言葉が出てくる。これが北方遊牧民族の言葉であれば、苻洛が持ってきた言語かもしれない。苻洛＝応神は大陸復帰を目指していたと思うが、応神天皇が最終的にどうなったかはわからない。

前秦の秦はまさにハタであり、秦氏は前秦から来たのかもしれない。最近の遺伝子解析によると、古墳時代中期に大きな集団が渡来して、特に近畿地方を中心に日本人の血が弥生時代とは大きく異なってしまっているとのこと。この時代の大陸から日本への人の移動という大きな流れの中に、秦氏もいたのかもしれない。

（講演を聞いて）

中国の五胡十六国の時代は、『三国志』の時代と隋・唐の時代の間、約 150 年の激動の時代であり、特に華北では異民族の王朝が次々に交代していった時代である。しかし、高校で学ぶ世界史ではごく簡単に解説されるのみである。

今回の講演で岡氏は、翻訳中の『資治通鑑』の記述内容等を踏まえて、五胡十六国時代の中国（華北、華南）、朝鮮半島などの政治情勢の変化とそれによる混乱がいかに当時の倭国に影響を及ぼしたかについて、そして、前秦の将軍であった苻洛が日本にやってきて応神天皇になったのではないかという小林惠子氏の説の紹介などを含めて解説された。秦氏の渡来も、このような文脈の中で考えるべきであるということが理解できたが、それにしても、にわかには信じがたいようなスケールの大きな話題提供であった。

質疑応答の中で、秦氏の渡来をめぐって、①西南アジア方面からシルクロードを経て景教徒として渡来、②秦の始皇帝の末裔として弓月の君などが渡来、③朝鮮半島からの亡命者としてー百済、新羅あたりから渡来、の 3 説があるが、講師の考えはどうかとの質問があった。これに対しては、『資治通鑑』には秦氏が倭国に行ったとは書かれていないが、408 年くらいに北魏で慕容氏が弾圧されて職能集団の秦氏が高句麗などに逃げ込み、

頼って行った先が、（小林惠子説の）苻洛＝応神がいる倭国だったという可能性が大きいのではないかと思うとのことであった。

秦氏の渡来という事象そのものについての詳細な解説がなかったのは残念であったが、また別の機会を期待したい。『資治通鑑』の日本語全訳という前人未踏の大事業に取り組んでおられる岡氏に心から敬意を表するとともに、その完成を祈りたい。

（注 1）北宋の司馬光が英宗の勅を受けて編集し、1065 年に完成した歴史書。紀元前 403 年から 959 年までの 1362 年間の史実を編年体で記述。
（注 2）鮮卑族が建てた前燕、後燕、西燕、南燕と漢族の北燕があった。
（注 3）仏教を弾圧した北魏の大武帝（たいぶてい）は 452 年に殺され、その後仏教は興隆して 460 年頃から石窟寺院が造られはじめた。

（井上知明）

令和 6 年 4 月 7 日

「歴史に見る能の魅力と役割から池田綱政を再考」

講師　観世流藤々会会員　土井秀吉 氏

参加者 25 名。岡山藩主池田綱政は、後楽園を開園し、能舞台で能を領民に披露したことが伝えられるが、名君の父池田光政に比べ評価は低く、元禄時代の大名を評価した『土芥寇讎記（どかいこうしゅうき）』によれば、「不学・文盲・理に暗し」とも。光政は、幕藩体制が武断政治であった時代の中で岡山池田藩初代として藩の基礎を固めたのに対し、綱政の時代は、文治政治へと変わり、藩政の執行体制も確立した中で影が薄くなっていると指摘。津田永忠は「社倉」の終生専任管理者として新田開発等で脚光を浴びたが、綱政は地味な「仁愛・慈悲」の文化人であり、彼が愛好した鑑賞の難解な能が、低い評価に関係しているのではないかと。そこで綱政の評価を再考すべきと、奥深い能の歴史的文化的芸術的魅力について、熱く語られた。

能の起源は、7 世紀に秦河勝が渡来系の芸能をとりまとめた猿楽とされるが、次第に田楽などの民族的な要素を取り入れ、15 世紀に世阿弥が能として集大成したという。世阿弥は、漢詩・論語・古今和歌集・源氏物語・平家物語・仏教思想等のエッセンスを戯曲に採り入れ、また、「夢幻能（むげんのう）」という新しいスタイルを生み出した。夢幻能とは、登場人物がすべて現実の人間ではなく、神・霊などの超現実的存在の主人公（シテ）が、名所旧跡を訪れる旅人（僧などのワキ）の前に出現し、土地にまつわる伝説や身の上を語る能形式。驚嘆すべきは、この世阿弥が確立した夢幻能の戯曲と演技は、現在まで綿々と変わることなく受け継がれていることだという。この伝統固持が、現代の我々にとって能の鑑賞を難しくしている。能は三間四方の空間の中で、簡略化された道具と音楽と演舞によって演じられ、そこには数々の約束事がある。更には、世阿弥は当時の仏教観（無常観・非哀観・死生観）を能の世界観としている、池田綱政は、夢幻能の約束事や世界観を予め理解していたことは明らかで、その点は再評価に値する。

例えば能舞台の「屋島」は、世阿弥によって完成された作劇法「夢幻能」で構成されており、前半は旅の僧が屋島の老漁夫（源義経の化身）に宿を借りるが、老漁夫は僧の求めで義経の戦いを詳しく語る。やがて僧が眠りに陥ると、後半では夢の中に義経が現れ、死後に「修羅道」に落ち、来世でも戦い続けなければならない苦悩を吐露する。前半で老夫婦が義経の戦いを客観的に語り、後半で義経が心境を主観的に吐露する構成が「夢幻能」である。つまり三人称から一人称に変えることで一つの戯曲を立体的に構成している。「修羅道」は中世仏教の死生観に基づく来世の一つであり、後半義経は法被を着て登場するが、法被は鉄兜を着用しているという能の約束事の一つであることなど、事前知識が観劇の前提となる。

以上のように、中世の言葉と精神文化をそのままに受け継ぐ能は、いきなりの鑑賞は困難である。図書館やネットで曲目ごとの鑑賞の事前学習をし、郷土岡山の池田綱政を見習って、歴史的文化的素養をもって能を楽しんで欲しいと結ばれた。

（板野忠司）

岡山歴史研究会

会長・事務局長　楠　敏明

岡山歴史研究会

副会長　大河原　喬

岡山歴史研究会

副会長・会計　中山　幸子

岡山歴史研究会

事務局次長　濱手　英之

岡山歴史研究会

事業委員長　古川　智

秦歴史遺産保存協議会

入会歓迎・年会費千円（現会員数325名）

和名抄『秦原郷』60基を超える古墳群と出合う
３～４世紀の古墳群＝茶臼嶽・一丁坑・大坑古墳
古代寺社＝秦原廃寺・麻佐岐神社・石畳神社・姫社神社
古事記・日本書紀・新撰姓氏録の「秦氏・・・？」

会　長　板野　忠司

岡山歴史研究会

運営委員　富久　豊

岡山歴史研究会

会報編集長　井上　知明

春の探訪会「児島湾の高島」報告

会員　*丸谷憲二*

５月12日（日）、40名が参加して児島湾の高島（岡山市南区宮浦）の探訪会が行われました。今回は野崎豊顧問に案内を依頼しました。当日朝はあいにくの雨で延期の恐れもありましたが、開催が決定。9時に桑野ふれあいセンター駐車場に集合し、定員５人の渡し船で高島まで８回の往復でした。

高島は神武天皇東征伝説の島であり、高島神社があります。近くには「神武天皇聖蹟高嶋宮顕彰碑」もあります。昭和42年（1967）９月に、瀬戸内考古学研究所による発掘調査が実施され、鎌木義昌氏（岡山理科大学教授）は「岩盤山頂上に巨石を中心とした祭祀遺構があり、周辺部から５世紀末から６世紀初頭の勾玉等の石製模像品や土師器、須恵器が発見されている。祭祀期間は比較的短期間である」と報告しています。他に日本製小型重圏文鏡や鉄剣、甲冑の断片等が発見されています。

岡山大学池田家文書、正徳３年（1713）の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』中に「黄蕨之前州」とあります。「黄蕨之前州」とは備前であり、「黄蕨」は吉備の最古の表記と思われます。宝暦２年（1753）の『黄蕨雑録』（岡山県立図書館蔵）にも収録され、享保６年（1721）の『備陽記』に、「吉備と云国名は当島の蕨よりはしまれり、今に至りて大なる蕨の生けるは此ゆへなるべし」と読み下しされています。つまり、高島は吉備という国名の発祥の地であったと考えられるのです。

今回の探訪会で一番面白かったのが、巨大磐座（高さ約3m、幅約2.5m）での岡嶋隆司さん（考古学）の説明中に楠　敏明会長が神武天皇伝説について質問し、話が噛み合わず盛り上がったことでした。新型コロナ感染症の期間は誰も高島を訪問していませんので、高島は荒れ果てていました。「鳥の糞が一杯だと思う。雨カッパ持参のこと」が野崎顧問の助言でした。特に竹林の竹は伸び放題、こんなに大変な探訪会になるとは想定していませんでした。しかし、全員無事に帰宅、これも楽しい思い出です。

高島神社は、総代さんが神社本庁からの脱退を検討中とのこと。高島神社の維持管理には費用が掛かります。氏子も少なくなっています。高島の観光地化が岡山市の観光事業として必要ではないかと提案したいと思います。同じ名前の高島でも笠岡市の高島は、市の観光部門と文化財課が一体化して高島観光に力を入れています。

今回は、イワクラ学会有志と平林金属㈱から平林実社長と有志が参加されました。若い人たちも県内の古代史に関心を持っていることが確認できました。若い人たちに会員募集を呼び掛けましょう。忘れられた文化財の観光化のための市民運動も必要ではないかと思います。最後に、本探訪会でお世話になった野崎顧問にお礼を申し上げます。

秦・長曾我部氏の会全国連合会　高知市で開催

３月９日（土）、高知県立高知城歴史博物館において秦･長曾我部氏の会全国連合会（発会式）が開催された。昨年、「サントピア岡山総社」で発起人・世話役の片岡昌一氏（高知県出身・横浜市在住・小説家）から、渡来人秦氏に関心を持つ岡山歴史研究会及び秦歴史遺産保存協議会に共催依頼の事前協議があり、趣旨に賛同していたところ、それが実現したものである。

全国各地の渡来人「秦氏」の痕跡を検証し、在来日本人との確執・融合・同化の歴史を調査し情報発信しようとの企画で、高知市長曾我部顕彰会、赤穂市秦氏を学ぶ会、高知県仁淀川町武田勝頼土佐の会、同県越知町

越知平家会などから、計約 100 人が参加し、盛大な総会及びシンポジウムが開催された。岡山県からも貸し切りバス 1 台で 20 名が参加した。

午前 10 時からの総会では、会長に長曾我部友親氏が選任され、仁淀川歴史資料館に連合会の本部を置き、年 1 回の総会や史跡見学会、会報の発行などが決まった。

午後からのシンポジウムでは、田中英道東北大学名誉教授が「渡来人秦氏と古代日本」と題し、基調講演をされた。秦氏はキリスト教ネストリウス派のユダヤ人景教徒で、遺伝子解析からも「失われた 10 部族」のユダヤ人が南方やシルクロードを通り渡来したものだと解説をされた。西南アジア・大陸・朝鮮半島などから我が国を目指して渡来してきたのは、彼らから見て東側にある日本をめざす太陽信仰と蓬莱信仰に基因するもので、南方ルートで紀元前 11 世紀ごろからすでに渡来していたとのこと。秦氏はユダヤ人の総称とも言えるもので、蘇我氏も元はユダヤ人だとのこと。渡来後も秦河勝のように朝廷とも親密になり、しかし政治には直接介入せず、技術集団として殖産振興に貢献した。日本人は、ユダヤ人が持ってきた富、技術を学び、働くことを知ったという。秦氏は、渡来した後もユダヤ教などを押し付けず、各地の我が国の文化を受容し同化したという。渡来は､5 波にわたり､3 波目が秦の始皇帝と徐福で､それが秦氏となったという。秦の始皇帝の子孫「弓月ノ君」（融通王）君は、秦氏の先祖であり、やはりユダヤ人という。

日本語は、ユダヤ語から来たと言ったのは、アイデルバーグ。しかし、日ユ同祖論は、日本では受容されず、キリスト教徒は日本人の 1%未満である。

田中英道氏

基調講演の後、片岡昌一氏をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われ、活発な質疑応答があった。田中名誉教授は、渡来の時期、経路は複数あり、古事記・日本書紀の記載など中国・朝鮮半島からの渡来説も肯定された。唐に正式に景教が伝来したのは 635 年とされるが、それ以前からも秦氏は断続的に大陸を通じ我が国へ渡来してきたという。秦氏は、灌漑、治水、絹織り、酒造など技術革新に貢献し、関東や東北にまで広く居住し、現在の多くの日本人の基礎をなしていると結んだ。

なお、高知の会より、長曾我部氏は、信濃秦氏の秦能俊が土佐国長岡郡宗部郷の地頭となったことで改姓したもので、もとより秦氏そのものであると解説された。

10 時から 17 時まで、田中名誉教授の懐の深い親切丁寧な助言もあり、きわめて有意義な 1 日となった。大変御世話になった高知市の関係者の皆様、そして代表幹事役の片岡昌一氏のご労苦に厚く御礼申し上げたい。また、武田勝頼土佐の会の山崎様より、帰りのバスに夕食弁当の差し入れを賜り、心から感謝している。

（板野忠司）

秋の探訪会「陰陽師・安倍晴明ゆかりの地　浅口市」のご案内

秋の探訪会「陰陽師・安倍晴明ゆかりの地・浅口市」を以下の要領で開催いたします。

安倍晴明は、平安時代中期に活躍した陰陽師で、天文道を学び伝え、天皇をはじめ諸家の陰陽道諸祭や占いに従事し、名声がきわめて高かったといわれています。浅口市内には、晴明ゆかりの伝説地が多く残っており、その地を探訪します。また、金光教門前町の大谷地区と金光教本部境内を訪れ、施設と歴史・伝説を見聞します。多数のお申込みをお待ちしています。

1．日　　時：令和 6 年 10 月 19 日（土）9:00 ～ 15:00　小雨決行

2．集合場所：JR 金光駅　北口　駅駐車場　9:00 集合

3．参 加 費：2,000 円（貸切バス料金他）

4．昼　　食：金光教門前町　大谷地区　「つちや食堂」　名物　かつ丼　弁当持ち込み可能

5．参加募集数：約 25 名（先着順）

6．案　　内：金光英子氏（元金光図書館長、会員）

7．主なコースと探訪予定地

- 9:00　　金光駅駐車場　貸切バス出発
- 9:10 ～ 10:10　占見地区　安倍晴明の墓他
- 10:20 ～ 11:20　金光駅～金光教門前町　大谷地区
- 11:20 ～ 12:00　昼食 「つちや食堂」
- 12:00 ～ 13:00　金光教本部境内の施設と歴史
- 13:30 ～ 14:30　寄島町　大浦神社
- 15:00　　金光駅駐車場　解散

【概要】

- 占見地区　安倍晴明の墓他　：その名も晴明の占いに由来するといわれる土地で、ライバル芦屋道満の名も多く残されている。
- 金光教門前町　大谷地区　：門前町として発展してきたエリア。参拝者に提供する食事や土産物店が多い。
- 金光教本部境内の施設と歴史：近代建築家の江川三郎八が建築した金光教の施設と歴史を紹介してもらいます。
- 寄島町　大浦神社　：997 年、晴明がその霊地に応神・仲哀天皇、神功皇后の三神を祭り、地方の氏神とした、と伝えられています。

出典：浅口市観光ガイド

8．申込及び問合せ先　古川 智（事業委員長）

参加ご希望の方は、以下のいずれかの方法で氏名、住所、電話番号をご連絡ください。

電話　080-1931-7463 「SMS（ショートメール）も可」

メールアドレス　s.furukawa@seibuct.jp

- 氏　　名
- 住　　所　〒
- 電話番号

編集後記

今号には 4 月 29 日の令和 6 年度総会の報告、及び武庫川女子大学教授の山口豊氏による記念講演「岸田吟香の生涯と功績」の概要を掲載した。これまで岸田劉生の父という認識しかなかったのであるが、幕末から明治にかけて多方面に活躍し、偉大な業績を残した人物であることがよく理解できた。薬剤師でもある自分としては、目薬の製造販売から始まった薬業界や薬学会等での活躍、貢献も印象深かった。

歴研サロンの報告は 1 月～ 4 月分を掲載した。1 月の青木佳之氏の「疫病の歴史から見る祇園神社と牛頭天王物語」は、医師で歴史にも造詣の深い青木氏が、祇園精舎の守護神で病気を防ぐ神である牛頭天王について、その信仰の流れを追うとともに、併せて科学・医学としての現実空間と歴史的仮想空間の共存についての自説を展開されたものであり、新型コロナ感染症を経験した今日、大きく評価されるべき考え方であると思う。

3 月の岡將男氏による「資治通鑑翻訳から見た秦氏渡来」は、同氏が翻訳中の『資治通鑑』の記載内容等から、秦氏が渡来したと考えられる五胡十六国の時代の中国、朝鮮半島の混乱と政治権力の変遷を概括され、特に小林惠子氏による、前秦の苻堅のいとこにあたる苻洛が日本に来て応神天皇になったとする驚天動地とも言える説を、牛まろびが牛窓に変化したとの『風土記』逸文などを踏まえて肯定的に紹介された。また、苻堅の称号が大秦天王であり、北方遊牧民族には他にも天王と称する例が多いことを指摘されたが、このことは日本の天皇のルーツを考える上で参考になるのではないか。天皇家は男系男子相続を続けてきたとされるが、これは北方遊牧民族にも見られる習俗である。タイトルとは異なり秦氏渡来の話は多くはなかったが、大変興味深い内容の講演であったと思う。岡氏の今後ますますの御活躍を期待したい。

その他のサロン報告としては、「洛中洛外図の時代の京都を歩く」や「歴史に見る能の魅力と役割から池田綱政を再考」を掲載した。また、春の探訪会として行われた児島湾の高島探訪の報告などを掲載した。

（井上知明）

発　行　岡山歴史研究会
会　長　楠　敏明
編集長　井上知明
事務局　〒701-0101 倉敷市日畑825　楠 敏明方
電　話 090-7894-5519
メール　aquatechnos@trad.ocn.ne.jp
ホームページ http://b.okareki.net/